

藤森照信 異端からの逆転

女性を引き寄せる“共感建築”に学べ

藤森照信氏が設計した「多治見市モザイクタイルミュージアム」(背景の写真)や「ラ コリーナ近江八幡」が多くの人を集めている。女性の割合が多いことも特徴だ。藤森氏は、もともとは建築史が専門の研究者。

40代後半で「タンポポハウス」や「ニラハウス」といった異色の緑化建築を設計して名を馳せ、“知る人ぞ知る建築家”あるいは“建築界の異端”と見られてきた。

それがここに来て、「社会が大注目する存在」へと評価が変わりつつある。

多くの女性に取材すると、藤森建築に引かれる理由は「写真に撮りたい」ということらしい。

これまでの現代建築にはなかった何らかの“共感”を抱いているようだ。

建築界はそこから何を学ぶべきなのか。本特集では、話題の2施設を取材するとともに、活動分野の異なる4人との対談を行い、「この先の建築」を展望するヒントを探った。

(構成:宮沢 洋=本誌、P39~45・P56~58執筆:佐野 由佳、P46~55・P59~61執筆:長井 美暁=以上、ライター)

P39 プロローグ

女性客100人に聞きました

P42 対談1●「創作」について

小田和正氏(ミュージシャン)

P46 対談2●「歴史的 position 付け」について

五十嵐太郎氏(建築史家、東北大学教授)

P49 近作りレポート●ラ コリーナ近江八幡

田園に200万人呼ぶ藤森ワールド

P56 対談3●「街」について

馬場正尊氏(オープン・エー代表、東京R不動産ディレクター)

P59 対談4●「建築とヒューマニズム」について

榎文彦氏(榎総合計画事務所代表)

P62 対談を振り返って

禁じ得ない“装飾”の2文字

女性客100人に聞きました 心をつかむ理由は「インスタ！」

藤森照信氏が設計した「多治見市モザイクタイルミュージアム」(岐阜県多治見市笠原町)が、予想をはるかに超えた来館者を集めている。特に女性客に大人気——そんな噂は本当なのか。オープンから1年目の今年6月、来館者の女性100人にインタビューをすべくミュージアムに向かった。

何がそんなに女性の心をつかんでいるのか。確かめるためだ。

若い女性は日頃から多い

同施設は、笠原町の基幹産業であるタイル製造の歴史や技術、製品の魅力を次代に伝える場所として、

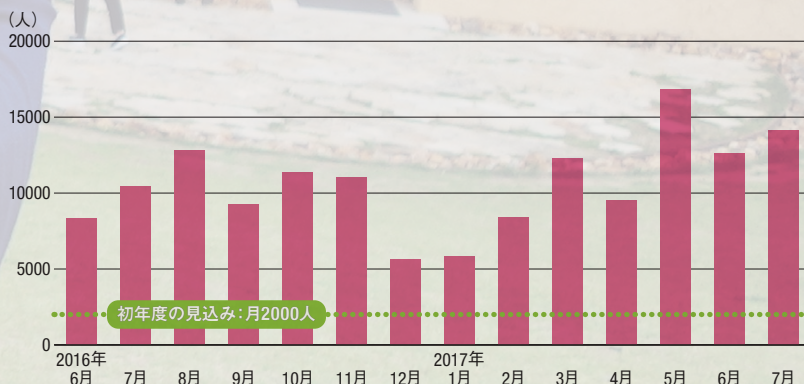
2016年6月にオープンした。

取材に訪れたその日、館内は午前中からごった返していた。確かに、圧倒的に女性客が多い。女性同士のグループは年齢を問わず(写真1)。土曜日ということもあり、若いカップル、子どもを連れた家族、熟年夫婦、親戚一同で来ましたという団体もいた。

声をかけた女性108人中、105人は初めての来館。残る3人はいずれも2度目で、地元の人。兄弟や親戚を連れて来たというケースだった。

エリアとしては、地元よりも少し離れた岐阜市などから来た人が多く、続いて隣の愛知県名古屋市、春日井市などから。岐阜県、愛知県からが

〔図1〕オープン直後から予想の4倍、さらに増加中!



多治見市モザイクタイルミュージアムの有料来館者数の変遷。オープンした昨年6月から今年7月まで、厳冬の季節を除いては、ほぼ月1万人前後が来館。月2000人という当初の見込みを大幅に上回っている

〔写真1〕「インスタ」用の撮影は必須

多治見市モザイクタイルミュージアムでは、若い女性来館者の間で、体験工房でつくった「モザイクタイル貼りフォトフレーム」越しに外観写真を撮って、インスタグラムにアップするのがはやっている。建築の外壁にポチポチ埋め込んである、タイルや茶碗の破片を撮る女性も多い

(写真:41ページまで佐野由佳)

〔写真2〕どのフロアも1日中女性客でにぎわう

1階のミュージアムショップ。モザイクタイルのピアスなどのアクセサリーに「かわいい」の声しきり。カップにタイル詰め放題も人気。同じフロアに体験工房がある。館内は1日中、常に盛況だった

今日も満員御礼
ありがとうございます

タイルの
アクセサリー、
マジかわいい!

上の階も
楽しかったわ♡

えっ、
500円で?

詰め放題
だって



〔写真4〕思い出を飾るフォトフレームを自作
体験工房で特に人気の「ワンコイン工作」は、好きなタイルを選んでオリジナルの小物をつくれる。ひとつのフォトフレームを2人でつくるカップルも。男性は女性の付き添いで来ているケースが多いが、一緒に楽しんでいる様子だった

半数以上を占め、ほかに京都府、大阪府、三重県、静岡県などの近県、次いで1割ほどが東京からだった。

当初予想の4~8倍の来館者

ミュージアム全体の有料来館者数は、平均すれば月に約1万人ほど。当初は、月に2000人、年間に2万5000人ほどの来館者を想定していたが、いざ蓋を開けてみたら最初の月に8352人が来館(図1)。今年の

ゴールデンウィークに至っては「朝来てみたら入り口に行列ができていた」(各務寛治館長)ほどで、5月は過去最高の1万6820人が訪れた。予想をはるかに上回る盛況ぶりだ。

この日は、岐阜市立女子短期大学の学生たちが、課外授業を兼ねて来館していた〔写真2〕。それもあって若い女性が目立つのかと思ったが、各務館長いわく「日頃から若い女性が多い。東京でタイルショップを開くために、左官の修業をしている20代の女性も来て、びっくりした」。

では「行ってみたい」と思ったきっかけは何か。50代以上の女性は「テレビの番組で見て」という人が多かった。最近もローカル番組の情報コーナーで、ミュージアムが紹介されていたという。

インスタ時代のアイドル建築

一方、20代、30代の女性たちの大半は、ここを知った理由として「インスタ!」と答えた。念のため説明すると、インスタとは「インスタグラム」の略で、写真に特化したSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)。スマートフォンなどで撮影した写真を

うちのキッチンも
タイル貼りたい♡

体験工房、
予約しよ～



投稿し、様々な人と共有できる。

「ラコリーナ近江八幡 (49ページ参照) もインスタで知って、両方行きました」という人も。そして今度は、「自分も写真を撮ってインスタにアップしたい」。実際、外に出て外観の写真を撮る、あるいは自分たちも一緒に工夫を凝らして写真に収まる人がとても多い(写真3)。ここはまさに「インスタ時代のアイドル建築」なのだ。

「特に今、若い子の間ではやっているのが」と、20代女性が教えてくれたのが、「自分でつくったモザイクタイルのフォトフレーム越しに建物を撮る」こと。フォトフレームは、1階の「体



〔写真3〕ここもあそこも「写真撮りたい!」

左: 建築と一緒に自分たちを写すことも忘れない。普通じゃない建築は、普通の写真じゃつまらない、という気持ちにさせる。右: 4階の半屋外スペースにある「タイルのカーテン」も藤森氏のデザイン。キラキラしたクモの巣に、引き寄せられる女性たち

験工房」の「ワンコイン工作」で、500円で作ることができる(写真4)。

この体験工房は、オープン以来コンスタントに人気がある。冬の寒い時期に来館者数が落ちても、体験工房の人数は落ちない。安定的に月に2000～4000人が参加している。

実物は写真以上に楽しい

実際に来てみた感想としては、「モザイクタイルがかわいい」(20代女性)、「昔、こういうお風呂とかあったよね、と思って懐かしかった」(50代女性)、「4階の展示が素敵」(30代女性ほか多数)、「全体的に色が素晴らしい」(40代女性)、「自宅のキッチンを改装するのにイタリアにも探しに行ったくらいタイルが好き。今度はここに相談に来たい」(60代女性)と展示に対する感想が多いなか、「階段

が好き!」(30代女性)という人も。

藤森氏の建築は女性から「かわいい」と言われることが多いが、ここでは、「かっこいい」「きれい」の声。「藤森さんの建築はほぼ見ている」(40代女性)という熱心なファンもいた。

「まわりの友達もみんな来ている」と話す20代のカップルは「予想以上に楽しかった」という。女性に限らず大人も子どももウキウキしている感じが印象的だった。

各務館長は「それがこの建築の力だと思う。産業振興の目的はもちろんあったが、ここまでの反響は予想していなかった。あと5年は様子を見なければ、この建築が与えた成果は目に見えないかもしれないが、地元の意識が変わる、マーケットが変わるきっかけになりつつある。その手応えは確実にある」と話す。

小田和正氏

(ミュージシャン)

自分を「パクる」タブーの先へ



4人との対談で藤森建築の特質を探る。1人目は東北大学建築学科で同級生だった小田和正氏。対談の場は、水戸芸術館で開催された「藤森照信展」の展示室。ともに70歳にして見えてきた表現の境地を語り合った。

—— 展示会場を回られた感想からお聞かせください。

小田 よく頑張ったな、という感じ。藤森の建築を、専門家が認めざるを得なくなったんだっていうのがすごいと思う。藤森のつくるものは変わってるから。どう考えたって、「私のところにもつくってください」って頼むようなもんじゃない。

藤森 そりゃそうだ(笑)。

小田 つくるときは基本は1人で、そ

の都度、仲間を呼び集めるやり方だって言ってたよね。一匹狼的な存在でいながら、突っ張ってなくて、ついでに客も集めちゃって。本人にとってはそれが正道なんだろうけど、淡々と異端なことをやり続けて、ここに至ってることにびっくりするよ。

藤森 そうだね。

小田 見ているうちに、普通の四角

いものはつまらないんだという錯覚に、だんだん引きずり込まれる感覚があった(笑)。

藤森 実は「ラ コリーナ近江八幡」(49ページ参照)は、最初は大手の設計事務所が設計を進めてたんだけど、社長が「こういうものをつくりたいんじゃない」って起工直前にキャンセルして、依頼が来たんだよ。

小田 想像のつかないものが欲しかったんだろうね。

藤森 完成後に、その断られた設計事務所の担当者が見に行き、一緒にいた奥さんが「あなたのとこでやらなくてよかったわね」って(笑)。その担当者も、「私もそう思いました」って、後でお会いしたら言っていました。

60歳でも吹っ切れなかった

—お2人はご自分のつくるものの人気について、どう感じていますか？

小田 女性に大人気なんだって？

藤森 オレがじゃないよ。そこが小田とは違うところ(笑)。どこが女性に評価されるのか、自分では分からない。

小田 分からない方がいいかもね。

藤森 私としては、子どもの頃の工作の延長でやってるみたいな感じだから。最初は建築を見て「かわいい」とか言われるのが、すごく嫌だった。

小田 そうだろうね。

藤森 私のなかでは「かわいい」わけじゃないから。「ラ コリーナ」の草屋根は、私のやりたいことと、みんなが「かわいい」と言う、ぎりぎりの接点で



「椅子もつくったりするんだ」と、藤森氏がデザインした家具を不思議そうに眺める小田氏。どこか昆虫のような怪獣のような、これらの椅子やテーブルは、「ラ コリーナ近江八幡」の銅屋根(たねや本社屋)の中で、実際に使われている

すよ。そう思えるようにはなってきた。

小田 歳とったんだよ(笑)。

藤森 喜ばせようと思ってつくってるわけではないし。歌をつくるとき、そういうことは考えるの？

小田 喜ばせようというより、自分が納得してそこをクリアしないと。結果的に喜んでもらった、ってことかな。

藤森 女性に好まれている、っていうのは最初から感じてたことなの？

小田 いや、結果だよ。男の人はあまり名乗り出てこなかったから。最近になって、昔から聞いてましたとかさ。今頃言うなよお前、みたいな(笑)

藤森 ハッハッハ。

小田 もっと早く言ってくれれば、もうちょっと生きやすかったのに。「女々しい」とかさんざん言われて。

藤森 あ、言われてたの？ それは評論家みたいな人が言うの？

小田 タモリがね、ラジオとか深夜番組とかで、オフコースは女々しいっ

て。それが効いたんだよ。みんなよく知らなくても、女々しいと言っておけば当たってるだろうみたいな。

藤森 コンサートに呼んでもらって行くとき、いい歳して走り回ったり、客席の間に入ったりするじゃない。びっくりしたのは、「自分がファンの人の方に駆け寄っていくと喜ばれることに最近気付いた」って、小田がテレビで話してたことだよ。そんなこと、昔から分かっているとってた。

小田 いや、本当にびっくりするくらい喜んでくれるんだよ。若い頃はそれに気が付いても、受け止める器量がないから。手を振ったりするのも、恥ずかしかったし。今いろんなことが平気だからね。喜んでるんだし、いいかって。

お前と一緒にだよ(笑)。60歳ではまだ吹っ切れなくて、70歳になって見えてくるものがある。いくつになっても発見があるよ。



小田 和正 (おだかずまさ)
ミュージシャン

1947年横浜市生まれ。東北大学工学部建築学科卒業、早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了。大学院は池原義郎研究室に在籍。69年オフコースを結成。70年からプロとして音楽活動を開始。代表曲に「愛を止めないで」「さよなら」「Yes-No」ほか多数。89年オフコース解散後、ソロとして活動を開始。「ラブ・ストーリー」は突然に「270万枚を超える大ヒット」。2016年リリースのオールタイムベスト「あの日 あの時」が「アルバム首位獲得最年長アーティスト」記録を更新。同年24会場48公演37万人動員の全国ツアー「君住む街へ」を実施するなど、精力的な活動を続ける

「他人と似てはならない」

——創作するときの、自分なりのルールのようなものはありますか？

藤森 私の場合、建築の歴史をやったり批評をやっていたから、設計するとき他人と似てはならないっていう、ものすごい圧迫があるわけ。だいたい歴史をやってる人が歴史っぽいものを設計すると、「あれは歴史家だから」でおしまい。戦後のアメリカの理論家に、そういう人が大勢いるんだよ。この程度のものをつくるために、あんなに難しいことを言っていたのだから。それは嫌だったから、先人がやったものとか、一般的なことはやっちゃいけないって思ってきた。

小田 へえ。「歴史家だからこそオリジナリティを」って思っていたのは意外だね。

藤森 あ、そう？ だって設計始めたの45歳だもの。自分で言うのもな

んだけど、歴史家としてはちゃんとひと仕事した後だから。そういう、自分のなかの縛りはあった？

小田 感じないかもしれないけど、いわゆる「パクる」っていうのは自分のなかではタブーだったね。ありきたりの言葉が並んでるような歌詞に見えるかもしれないけど、そのなかで自分をどう出すかは考えた。

藤森 パクるっていうのは細かいこと？ 聴いて分かるようなこと？

小田 分かるようなものもあれば、うまくカムフラージュしてるものもある。でも、パクることは別に悪いことじゃない。あんまりだ、っていうのは問題だけど、自分のなかを通ったものであれば、これは明らかにあそこから来てるなっていうのであってもいいんじゃないの。難しいけどね、その判断は。

藤森 私もいろんなものから学んでるけど、相当注意深く学ぶね (笑)。学んだっていうのが、「生」にならない

ように。栄養になってしまうくらい、体に身に付いていけば。

過去の自分をどう越えるか

小田 でも、それがだんだん自分をパクることになるじゃない。これはもうやったな、って。それは困るよね。

藤森 小田はどうしてる？ そういうことある？

小田 あるよ。またそれかよって言われても、ちょっとクオリティーがいまいちかかっていうところで別の方向へ行くよりは、自分が納得するところにいけばいいんだろうなって、最近思うようになったね。

藤森 私も今後、植物を屋根に植えたら、だいたいこれ(ラコリーナ近江八幡)以下になるよ(笑)。で、どうしようかっていうのはある。自分の作品が目の前にそびえるような……。ただ、無理して変なことをやるのは嫌じゃん。

小田 いい話聞いたな。そうか、そんなに闘ってたんだ(笑)。

藤森 闘ってなさそうに見えるのは、ある程度、立場上の余裕があるからですよ(笑)。設計事務所だと所員を養わないといけないけれど、自分1人でしょ。大学にいたから。

小田は具体的にはどういうときに、自分の作品を自分で真似るような感じがするの？

小田 その都度、「何かのために取っておこう」ってことはできないわけ。今、こういうものをつくらなきゃ

いけないときに、できるだけのをぶちこんで、少しでも高みへ持って行こうとする。それで、次にまた同じようなテーマで書かなきゃいけないとき、この前全部使っちゃったなって。

考えて、考えて、考え抜いて極上のものをつくったうえで、またさらに同じところで、この前もさんざんやったじゃんっていう経験は、結構してきたね。でもまあ、何とか闘い抜いたという感じかな。

藤森 少しずらしたところでやると、展望が出たりしない？

小田 理論的にはそうなんだけど、なかなか。人によっては、角度をずらすと違ったものが書けるとかいうから、違う方からとは思うけど……。

藤森 私の場合は割と、自分の知らなかった建築材料で魅力的なものに出会うと、素材の力に導かれる。それ

は相当大きい。

小田 ああ、それは分かる。

藤森 どういうこと？

小田 例えば、楽器。ピアノでやっていたのをギターでやってみると、また違うものになるからね。楽器は持たないでつくってみようとかね。

藤森 それは最初に決めるの？

小田 いろいろ。最初に決めたり、途中、煮詰まってからそうしたり。

フィールドを歩き続ける

——後に続く若い世代にメッセージをお願いします。

小田 オレは相当頑張ったから(笑)。頑張れとはうかつに言えない。オレほど頑張れるか、お前って。でもやっぱり、いまいちだと思ったら、いまいちじゃないところまで、高みを目指してやっていくしかない。よくある

お説教みたいだけど、それが必ずどこかへたどり着くことなんだと思うな。懸命にやること。それしかないものね。60歳でも、70歳までまだ10年あるんだから。

藤森 建築のことで言えば、新しいものを見続けることが重要だっていうのはすごくある。見ると、栄養になるからね。それとね、「よし俺もつくろう」っていう気になる。

現代のものでなくてもいい。過去のものでも。そのためには出歩かなきゃいけないんだけど、やっぱりフィールドを歩いて、いつもアクションを起こしてほしい。どこかへたどり着ける感じはないんだけど(笑)、主体的にやる限り「飽きない」から。

ウェブで関連記事
限 本誌未掲載部分を含む対談の詳細版
※ na.nikkeibp.co.jp で「小田和正」と検索
限 定期購読者なら誰でも閲覧できる限定コンテンツ

喜んでくれるならいいかと思えるようになった
 (小田)

女性になぜ好まれるのか自分では分からない
 (藤森)



藤森照信 (ふじもりてるのぶ)
 建築家、建築史家
 1946年長野県茅野市生まれ。71年東北大学工学部建築学科卒業。78年東京大学大学院博士課程満期退学。79年博士論文「明治期における都市計画の歴史的研究」提出。98年「日本近代の都市・建築史の研究」で日本建築学会賞論文賞。2001年「熊本県立農業大学校学生寮」で日本建築学会賞作品賞を受賞。東京大学名誉教授、工学院大学特任教授。16年から東京都江戸東京博物館館長

五十嵐太郎氏

(建築史家、東北大学教授)

「フォロワーなし」でも思想は拡散？

「建築史」の文脈のなかで藤森建築が語られることは少ない。建築家としての藤森氏は歴史的にどう位置付けられるのか。五十嵐太郎氏は、「ポスト・ヒストリー（歴史の後）の建築家」という仮説を立てて対談に臨んだ。

五十嵐 「神長官守矢史料館」の竣工が1991年、「日本の近代建築」の

出版が93年。藤森さんが建築史家として日本の近代建築の通史をまとめ上げ、同時に建築家の第一歩を踏み出したとき、僕は大学院生でした。

99年に雑誌「10+1」^{テンプラスワン}の連載で、藤森さんの建築を「批判的地域主義」の流れで書きました。ただ、藤森建築は「地域性」といってもどこの地域かが分からなかった。

そして、2008年に出た鈴木博之先生編著の「近代建築史」で現代建築を担当したものの、藤森さんを位置付けられず、触れませんでした。

藤森 建築家の系譜図では私はだいたい、独りポツンという(笑)。

五十嵐 フォロワーがいると潮流が見えるので、歴史も書きやすいんです。日本ではまず丹下健三さんや原

藤森氏の自宅「タンポボハウス」は1995年に竣工。タンポボが枯れた後、野生のままに任せていたら、ニラがどんどん生えてきた。「ニラハウスじゃないのに」と藤森氏(写真:48ページまで鈴木愛子)

広司さん、伊東豊雄さんなどの潮流がある。また、隈研吾さんの建築に影響を受けたコピーが今、各地に増えているように、類似例が多いとそれも潮流になります。でも、藤森さんはそのどちらも当てはまらない。

藤森 だいぶ前、京都工芸繊維大学の中川理さん（建築史）に「フォロワーなしの建築家」と書かれた（笑）。事務所を持たず、自分のやりたいように建築をつくってきたからね。

五十嵐 やりたいようにとはいえ、構造的にアクロバティックなことをしないのは一貫していますよね。

藤森 構造的アクロバットは意識的にしない。構造表現主義は伊東さんなどが取り組んでいて、今さら私がやらなくていいし、他人の真似はしないという大原則もある。また、新しいプランを生み出そうという気もない。すると残るは仕上げ、表層のテクスチャーになるんです。

五十嵐 藤森建築によって、テクスチャーがこんなに一般の人に響き、建築の間口を広げるのだと分かりました。隈さんもテクスチャーに注力していますよね。見え方はだいぶ違うけれど、やっぱりポピュラリティーを得ている、実は藤森さんと共通するところがある。

藤森 隈さんが「藤森さんがいなかったら私はこんなに自由にテクスチャーを扱えなかった」と言っていた。藤森は「防波堤」だって（笑）。確かに、仕上げを構造と切って扱った

のは、私の「神長官守矢史料館」が最初かもしれない。

「達観」からの出発

五十嵐 僕は今回、藤森さんは「ポスト・ヒストリー」の建築家だろうと考えてきました。これには「歴史の後」という意味を二重に込めています。一つは藤森さんが通史をいったんまとめて、建築史家の仕事に一段落つけてから建築をつくり始めたこと。もう一つは鉄とコンクリートを使う限り、すでにあらゆることがやり尽くされ、構造または技術の画期的な進化はもう期待できない状況で建築をつくっていることです。

藤森 建築が他の科学技術と決定的に違うのは、一つの規模が大きいこと。だから材料はとにかく安くなければならぬ。建築はチタンすら自由に使えないからね、値段が高過ぎて。鉄とガラスとコンクリートを超える建築材料が出てくることは将来ともないでしょう。それに安心している。



五十嵐太郎（いがらしたろう）
建築史家、東北大学教授

1967年パリ生まれ。90年東京大学工学部建築学科卒業。92年同大学院修士課程修了。博士（工学）。中部大学講師・助教授、東北大学大学院助教授を経て、2009年～同教授。08年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展では日本館コミッションナー、13年のあいとりエンナーレでは芸術監督を務めた

鉄とガラスとコンクリートで建築をつくる構造技術も、ほぼ出尽くしたと思う。後は微妙な差異が生まれるだけ。人間はその差異を時代ごとに楽しむもので、歴史の研究を通してそのことを知っています。

五十嵐 100年後にこの時代を振り返ったら、明らかに鉄とガラスとコンクリートの時代ですね。

藤森 例えばSANAAの建築とバウハウスの建築は、実はあまり違わない。曲面があるかどうかくらい。

五十嵐 バウハウスではやっていない幾何学の可能性が空間に効果を与えているとは思いますが、基本的な技術は一緒ですね。藤森さんはそのあたりも達観しているから、やっぱりポスト・ヒストリーではないかと。

路上観察の系譜

藤森 私はずっと今和次郎（1888～1973年）と吉阪隆正（1917～80年）が好きで、今さんの一風変わった独特の資質を弟子の吉阪さんが受

系譜図ではだいたい、
 ひとりポツンといるから…
 (藤森)

フォロワーが多い方が
 歴史的に位置付けやすい
 (五十嵐)



け継ぎ、それが私の中に流れている
 と感じる。路上観察学会の活動は今
 さんのバラック装飾社や考現学を受
 け継いでやっていた自覚もある。

だけど最近、吉阪さんの直系であ
 る象設計集団の富田玲子さんに、
 「吉阪さんを継いでいるのはあなた
 だ」と言われたときにはびっくりした。

五十嵐 富田さんが言うなら、公式

な系譜として良さそうですね(笑)。

藤森 一方、「メイド・イン・トー
 キョー」など、塚本由晴と貝島桃代の
 アトリエ・ワンがやっていることはどこ
 か路上観察的だと思っていたら、貝
 島は学生時代に私の講義を受けてい
 たそうだし、路上観察の影響がある
 と言っていた。

うれしいのは、彼らが路上観察的

なことを建築の創造に振り向けてい
 ること。路上観察学会では創設当初、
 「自分たちのやっていることは観察だ
 けだけど、将来、何かものをつくる原
 理になればいいね」と話していた。私
 はこんな解体的な行為がものをつく
 る原理になるわけがないと思っていた
 けど、アトリエ・ワンは私が全く思
 いつかなかったやり方で、解体的な
 発想からものをつくることに成功して
 いる。

五十嵐 藤森さんとアトリエ・ワンも
 根っこがつながるわけですか。

藤森 実際につくっているものが似
 ていないと建築の潮流とは言えない。
 でも、思想の潮流は根っこがつなが
 ると言えるかもしれない。

ウェブで関連記事

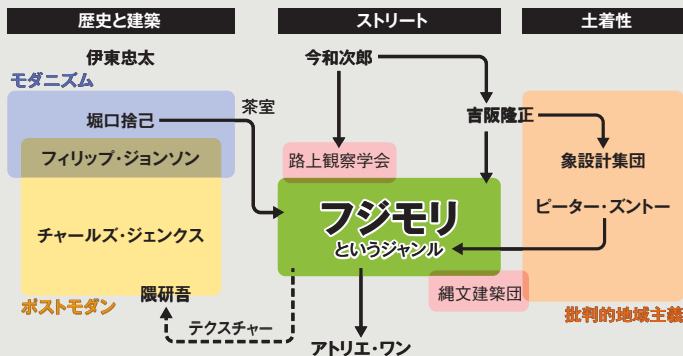
限 本誌未掲載部分を含む対談の詳細版
 na.nikkeibp.co.jpで「五十嵐太郎」と検索

限 定期購読者なら誰でも閲覧できる限定コンテンツ

対談を終えて 藤森建築という新たなジャンル——五十嵐太郎

藤森氏との対談で登場した人物名を組み込
 み、系譜図を作成した〔図1〕。もっとも通常の
 「〇〇スクール」と違い、彼は特定の流派に所
 属せず、新しく藤森建築というジャンルを生み出
 し、その後にフォロワーもつくり出さない。ゆえに、
 直接的な影響関係によらない非系譜的なチャ
 ートである。本図では、「歴史と建築」(設計も手掛
 けた歴史家、または歴史的な言説も語る建築
 家)、「ストリート」(大文字の建築ではない、路上
 の出来事への関心)、「土着性」(独特の素材
 や形態による場所性の創出)の3つに整理し、
 藤森建築を位置付けた。

〔図1〕五十嵐氏による藤森建築の位置付け図



藤森氏の建築と思想を総称するジャンルを、この図では「フジモリ」と名付けた。路上
 観察学会の南伸坊氏は「神長官守矢史料館」を「建築になった藤森」と例えたと言
 い、その建築と思想は切り離せない(資料:五十嵐氏の手書き図をもとに本誌が作成)

田園に200万人呼ぶ藤森ワールド

和・洋菓子のたねやグループが、拠点として整備を進める「ラ コリーナ近江八幡」。ここには藤森照信氏の設計した建物が4つある。菓子人気に加えて藤森建築が呼び水となり、滋賀県随一ともいえる観光客でにぎわう。

「ラ コリーナ近江八幡」（滋賀県近江八幡市。以下、ラ コリーナ）にある藤森建築は、2015年にオープンしたメインショップの「草屋根」、16

年に完成した本社社屋の「銅屋根」とカステラショップの「栗百本」、そして「草回廊」の4つだ。屋根の全面に芝を植えた草屋根はラ コリーナのゲートを兼ね、訪れた人は皆、ここに一度入って奥へと進む（写真1）。

前庭に立ち、緑の帽子を目深にかぶったような草屋根の姿を見ただけで心が躍るが、これはほんの序の口。草屋根の正面ドアを開けると、しつこい塗りの白い天井から壁の上部にかけて、黒い炭の薄片を無数に貼り付けた吹き抜けホールが現れる。

このホールを抜けて次のドアを開けると、今

度は目の前に水田が現れる。銅屋根と草回廊は水田を囲むように配置しており、正面奥には柵田が見える（写真2）。藤森氏は八幡山の麓の自然豊かな環境を生かし、駐車場から柵田までの外構や造園計画も手掛けた。“藤森ワールド”全開だ。

たねやグループの山本昌仁CEOは、「『わあ!』という驚きがいくつもある」と話す。

藤森緑化の到達点「草屋根」

敷地は、最寄駅の近江八幡駅から4kmほど離れた田園風景の中にある。交通至便とはとてもいえない。それでもユニークな建築や、ここでしか買

【写真1】来場者を迎え入れる「草屋根」

メインショップ「草屋根」を南側（駐車場側）から見る。屋根の勾配は45度で、高麗芝を採用。軒を支える柱はクリの木。頂部にはコウヤマキ（高野槇）を植えている（写真：55ページまで特記以外は生田将人）

えない、食べられない菓子や料理を求めて、16年には年間200万人が来場した。国宝・彦根城（滋賀県彦根市、16年の年間来場者数約79万人）をはるかに上回る、滋賀県随一の観光施設となっている。

ラコリーナはイタリア語で「丘」を意味する。山本CEOは「近江八幡という地域を感じてもらえる自然環境を未来に残したい」とこの土地を取得。草屋根の設計を藤森氏に依頼する際、自然と人間が共生する丘のイ

メージを伝えた。

草屋根は藤森氏にとって、建築緑化の1つの到達点だ〔写真3〕。それまで様々な植物を屋根や壁面に植えてきたが、植物の維持管理は手間も費用もかかり、どれも成功とは言い切れなかった。

しかし、たねやグループは植物を専門に扱う会社「たねや農藝」を有し、これだけ大規模な緑化でも発注・運営者が自らその面倒を見る体制が整っている。藤森氏は「自分がずっと

やりたいと思ってきたことをついにここで実現できた。本当に気に入っている」と語る。

樹齢250年の大木とバランス

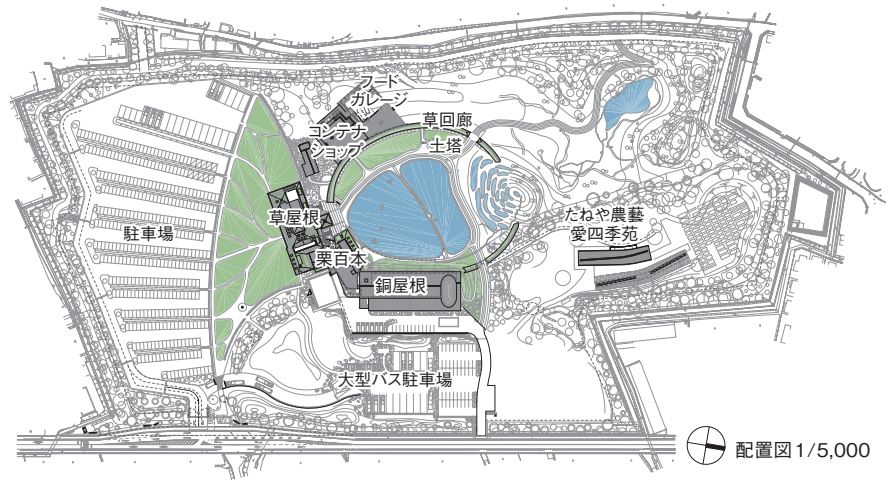
一方、銅屋根はその名の通り、赤茶色の銅が屋根と塔部の全面を覆う〔写真4〕。塔部は「手曲げ銅板」で、たねや社員などがワークショップで波状の加工を施した。銅板は藤森氏愛用の素材の1つ。「自然素材に合う工業製品を求めて、銅板にたどり着い



た。手に応答でき、風化の美しい点が自然素材に似ている」と評する。

銅屋根の建物の形は、樹齢250年のクスの大木を使いたいという山本CEOの希望から生まれた。この木は近江八幡の古い参道に取り残されていた「ご神木」を移植したもの。藤森氏はそれを切妻屋根から顔を出すようにして建築に取り込み、木のこんもりとした盛り上がりとバランスを取るために、反対側に塔部を設けた。

軒を支える柱は土手から生えてい



草屋根

草回廊

【写真2】ファンタジーのような“藤森ワールド”

敷地北側の棚田から眺める全景。まるでファンタジーのよう。水田に点在する巨石「七つ石」は、てっぺんを少し削って木を植えていて、なんともほほ笑ましい姿だ。「草回廊」の後ろに立つポルト屋根の建物は、今年7月にオープンしたフードガレージ。この施設的设计は、建築をアキムラフライング・シーの中谷弘志氏、内装をトネリコが担当した

〔写真3〕連続する緑の屋根

「草屋根」の1階はホールの両脇に和・洋菓子の売り場があり、2階はカフェ。緑化屋根は遠目からは一瞬、山に窓があるように見える。下の写真は「銅屋根」4階の展望室から「草屋根」方向を見た様子。「栗百本」や「草回廊」も緑化屋根なので、連続感がある



草屋根



A



B



C

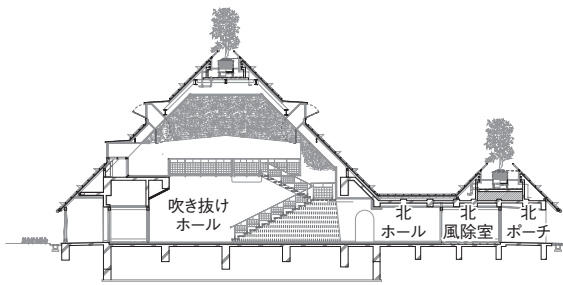
銅屋根

D

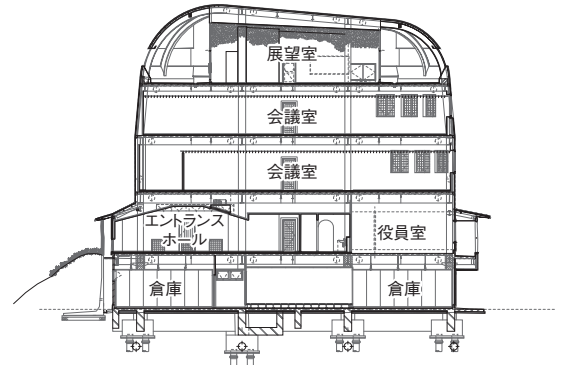
〔写真4〕「銅屋根」の塔部はご神木と対をなす

A: 横文彦氏が59ページの対談で「覆面した男に見える」と表現した「銅屋根」の塔部 B: 最上階(4階)の展望室は、天井や壁面、開口部のガラス面に、小さく切ったすず(錫)の板を、「草屋根」の炭と同じようにコーキング材で張った。藤森建築の資料を展示 C: 1階のエントランスホールには、同社がつくった巨大な苔山を屏風代わりに置いた。1日4回実施の「ラコリーナツアー」に参加すると、エントランスホールや展望室に入れる D: 西から見た全景。藤森氏は、外観とエントランスホールと展望室以外には関与していない

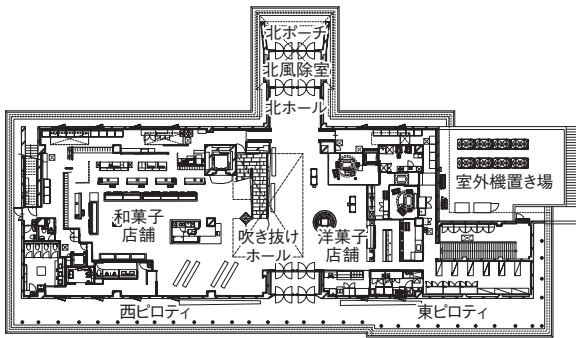




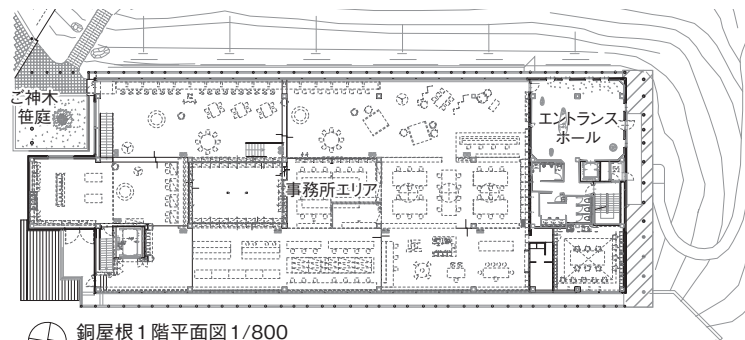
草屋根断面図 1/500



銅屋根断面図 1/500



草屋根1階平面図 1/800



銅屋根1階平面図 1/800

るように見える。土手をつくったのは、草回廊の屋根との連続性を考えてのこと。草回廊は今年中に、棚田や銅屋根の土手とつなげる予定だ。

栗百本も、銅屋根の土手と連続して見えるように建てた〔写真5〕。

水田は敷地内で最も低い。草回廊や土手で囲むことで、神が宿る聖なる山という八幡山の力を、水田にためる意味合いもある〔写真6〕。

つくる楽しさが伝わる

ラコリーナの藤森建築で共同設計者を務めたアキムラフライング・シー（滋賀県守山市）の中谷弘志代表は、「藤森先生は職人を乗せるのがうまい」と話す。藤森氏は様々な仕上げを試みる際、まず自分で実験し、見本をつくって職人に示す。できないと言わ

れても諦めず、次の策を練って再び示す。現場に必ず足を運び、そこでも自ら手を動かし、やって見せる。

そうした姿勢が職人の心に火をつける。自分たちプロがやるなら、藤森氏がやって見せる以上のものにしなければと発奮する。「あれは藤森マジックだ」と中谷氏。山本CEOも「つくった結果が出るたびに職人が前向きになっていった。そうなる強い。先生はいつも、皆でつくり上げるという姿勢で、感動した」と語る。

当の藤森氏自身は狙ってそうしているわけではないという。「自分で仕上げをするのが楽しみで建築をつくっているようなもの」で、「自分は建築家というよりも職人の延長にいる気持ちがあり、相手もそれを感じるのでは」と話す。

この「相手」には、山本CEOをはじめとする同社幹部や社員など発注者側の人にも含まれるだろう。仕上げやその素材製作のワークショップに参加しているからだ。つまり、建築というものづくりを設計者が率先して楽しみ、施工者や発注者も一緒に楽しんだ。そんな現場は他になかなか聞かないが、藤森建築では珍しくない。

いかにも手作業といった仕上げの数々は、たくさんの人が建築をつくることを楽しんだ証しだ〔写真7〕。建築は人の手が生み出すものという示唆もある。草屋根や栗百本で、菓子をつくる場面を見せていることにも通じる。ラコリーナでは「つくる」という人が生きるうえで根源的な行為と、その楽しさをそこここで感じる。それも、人々を引き付ける理由ではないか。



〔写真5〕「栗百本」はクリの木を100本以上使用

A・B:「栗百本」は「銅屋根」とつながって見えるが、法規をクリアするために棟を分けている。軒下空間は「草屋根」と同様に奥行きが深く、来場者の憩いの場所として機能 C:風除室のクリ柱には、山本徳次名誉会長が書いた店名の焼き印を押している D:カフェの中央で目を引く二股に分かれた太い木は、山中の敷地境界を示す目印の木だった

栗百本



〔写真6〕山と敷地が切り離されないよう屋根を緑化

「回廊は伝統的なイメージがあるからか、モダンな建築ではあまり見ないが、私はそんな平気だから」と藤森氏。木としくいによる縦縞は、イスラエルの彫刻家ダニ・カラヴァンの「ネゲヴ記念碑」からの着想。「草回廊」は木造ラーメン構造で、構造的に筋交いが必要だったので、長手方向にところどころ壁を設けた。そのため建築物の扱いとなり、建築確認が必要になった

草回廊



発注者に聞く 山本昌仁氏 たねやグループCEO

まだ構想の2割程度にすぎない

「ラ コリーナ近江八幡」は現時点で、構想の2割しかできていない。私の目の黒いうちに完成するのは無理かもしれないが、木や植物をしっかり育てながら、できることから進めている。



(写真:長井美暁)

敷地には以前、厚生年金施設が立っていた。その前に遡れば、豊かな自然環境があった。私はここに新しくつくる拠点を、単なる売り買いの場所には

したくなかった。わざわざ足を運んでもうなら、近江八幡を感じてほしい。そのためには自然環境を取り戻すことだと思い、土地購入後しばらくは何も建てず、土壌改良などに時間をかけた。

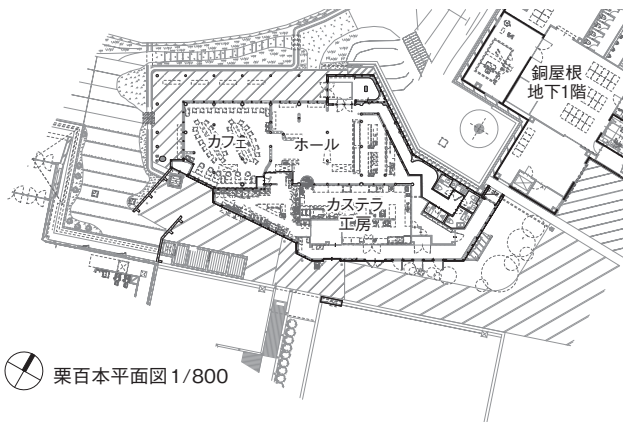
ここにどんな建物をつくるべきかは紆余曲折があった。しかし、藤森先生の「草屋根」のスケッチを見た瞬間、この人だと思った。入り口を開いてもらったようなもので、私の目指す方向も定まった。

先生とのやりとりではいつも衝撃を受けた。私からは全く出てこない発想が示される。壁の炭貼りにしても手曲げ銅板

にしても、初めはどうなることかと心配したが、できてみると作業した人の手の違いが予想以上にいい。自然が多様であるように、建築も、人の手作業が加わったところに自然を感じる。

来場者からは「故郷に帰ってきたようだ」「忘れていたものを思い出す」との声を聞く。「ここが好き」と自分だけの場所を見つけている人もいようだ。それぞれの想像力を呼び起こす環境ができているということだろう。

これほど多くの人に来てくれることは予想外だった。休日の駐車場や道路渋滞などの問題を解決していかなければならないが、自然に学ぶことをテーマに、今後とも取り組みを続けていきたい。(談)



栗百本平面図 1/800



【写真7】写真スポットとして人気の「土塔」

写真スポットは別につけていたが、藤森氏デザインのこの「土塔」をバックに写真を撮るのが大人気となったため、スペースを広げた。ドアの高さは1200mmで、子どもは通り抜ける

ラコリーナ近江八幡—草屋根、銅屋根、栗百本

■所在地:滋賀県近江八幡市北之庄町615-1 ■地域・地区:第一種住居地域、法22条区域、水郷風景計画区域、地区計画区域「観光・物産振興モデル地区」 ■前面道路:東17.98m ■敷地面積(施設全体):9万5543.85m²(公共空地を除く、事業用途で使える面積) ■建蔽率(施設全体):4.92%(許容60%) ■容積率(施設全体):7.02%(許容200%) ■発注・運営者:たねや、クラブハリエ ■設計者:藤森照信+アキムラフライング・シー ■設計協力者:K-eins(構造)、杉本設備設計事務所(機械設備)、山本設備設計事務所(電気設備)、匠(内装) ■監理者:アキムラフライング・シー ■施工者:秋村組

費:非公表(以下同)

銅屋根

■主用途:事務所・工場(菓子製造・販売) ■建築面積:1597.34m² ■延べ面積:3556.48m² ■構造:鉄骨造 ■階数:地下1階、地上4階 ■耐火性能:準耐火建築物 ■基礎・杭:杭基礎 ■各階面積:地下1階1404.96m²、1階1409.25m²、2階395.36m²、3階181.1m²、4階165.81m² ■高さ:最高高さ18.8m、軒高13.41m、階高3.7m、天井高3.22m ■主なスパン:10m×7m ■施工協力者(栗百本も同):新日本空調(空調・給排水)、フクヤマ電設(電気)、モデュレックス(照明器具)、総合デザイン(家具)、近新(家具) ■設計期間:2013年1月~15年4月 ■施工期間:2015年5月~16年5月 ■開業月:2016年6月

草屋根

■主用途:菓子販売店舗・工場 ■建築面積:1113.18m² ■延べ面積:1394.7m² ■構造:鉄筋コンクリート造、鉄骨造、木造 ■階数:地上2階 ■耐火性能:準耐火建築物 ■基礎・杭:杭基礎 ■各階面積:1階1039.02m²、2階355.68m² ■高さ:最高高さ12.92m、軒高2.9m、階高4.4m、天井高1階2.9m、2階2.375m ■主なスパン:10m×8m ■施工協力者:新日本空調(空調・衛生)、フクヤマ電設(電気) ■設計期間:2012年8月~14年2月 ■施工期間:2014年2月~12月 ■開業月:2015年1月 ■工事

栗百本

■主用途:菓子販売店舗・工場 ■建築面積:510.43m² ■延べ面積:499.96m² ■構造:鉄骨造、一部木造 ■階数:地上1階 ■耐火性能:その他の建築物 ■基礎・杭:杭基礎 ■高さ:最高高さ4.06m、軒高3.75m、天井高2.5m ■主なスパン:3m×3m ■設計期間:2014年7月~15年11月 ■施工期間:2015年12月~16年6月 ■開業月:2016年7月

馬場正尊氏

(オープン・エー代表、東京R不動産ディレクター)

住人もつくり手になる「工作的建築」の時代



前の対談(46ページ)で、建築史的には「フォロワーなし」と評された藤森氏。しかし街をホームグラウンドとして活動する建築家の馬場正尊氏いわく、その手法は若い世代に「ボディブローのように」影響を与えている。

藤森 私は歴史家として、街のことは意識的にやらない、触らないように

してきた。

馬場 どうしてですか？

藤森 学生時代に心に決めたいいくつかのことがあって、そのうちの 하나가、近代建築保存はやっても街並み保存には関わらない、それから社会的発言はしない。

馬場 確かに藤森さんは、イデオロギーに対する発言をしないですね。

藤森 意識的に、かなり注意してる。

馬場 僕の印象ですけど、それが藤森さんの穏やかさにつながっていると思います。路上観察学もそうですが、ある種の客観性があって、その距離の取り方が心地いいといいますか。

僕の先生(早稲田大学、同大学院時代)は石山修武さんで、イデオロギーの話とか政治の話とか、アジ

藤森氏が館長を務める江戸東京博物館(両国)の、実物大で再現した江戸の「日本橋」の上で。馬場氏が主宰する設計事務所オープン・エーは、現在の日本橋馬喰町にある(写真:58ページまで鈴木愛子)

テートする感じがすごくあって、熱狂的に引きずられるんですけど、藤森さんはそこからずっと引いたところにおいて、一貫してそういうものをユーモアというインターフェイスで返しているように感じます。

ユーモアを継承したい

馬場 僕からすると、今和次郎の考現学があって、その系譜に路上観察学があって、ちょっとおこがましいですが、東京R不動産(図1)もその文脈で捉えたいと思うんです。今和次郎が教えた早稲田の出身です(笑)。

東京R不動産は、不動産仲介ウェブサイトという流通の機能は持っていますが、最初は「空き物件からながめる東京」という僕のブログだったんです。視点は完全に考現学や路上観察学を大学時代に学んで、というか感じていたことに端を発しています。

藤森 そうだったんだ。

馬場 今和次郎の考現学も、どこかしらユーモラスで、関東大震災後のバラックのきつい風景を、こんなに生き生きとした生活のシーンとしてハッピーに描けている学問ってすごいなと思いました。

藤森さんたちの路上観察学も、真面目に都市を語ったり、フィールドワークを押し付けられる空気の中なかで、いい歳の大人が軽やかにマンホールをうれしがったりしているのを見て、ああ、こういう視線で気楽に都市を楽しんでもいいんだ。それも学



〔図1〕独自の価値観で選んだユニークな不動産を紹介
馬場氏が運営・制作ディレクターを務める東京R不動産は、世間に流通している不動産物件を、独自の価値観で選び直すことで、スペースの魅力を伝える不動産仲介サイト。愛情あふれる文章やタイトルに、引越す予定がなくてものぞいてみたくなる。東京のほか、大阪、神戸、稲村ヶ崎なども運営

馬場正尊(ばばまさたか)

オープン・エー代表、東京R不動産運営・制作ディレクター

1968年佐賀県生まれ。94年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。学部、大学院を通じて石山修武研究室に在籍。博報堂、雑誌「A」編集長を経て、2002年に設計事務所オープン・エーを設立。不動産仲介サイト「東京R不動産」を運営。東京のイーストサイドである日本橋や神田の空きビルを期間限定でギャラリーにするイベント「CET(Central East Tokyo)」を企画運営するなど都市を軸に活動。著書に「エリアリノベーション」、「PUBRIC DESIGN 新しい公共空間のつくりかた」(ともに学芸出版社)などがある

問やアカデミズムのなかに位置付けられるんだっていう、そのユーモアにはすごく影響を受けました。

東京R不動産も、必ず物件のタイトルで笑わせようと(笑)。そこを継承したい、ユーモアを持って都市を楽しみたいという感じはありましたね。

藤森 東京R不動産で私が興味を持ったのは、普通だったら捨てられるような、使い物にならないビルとかを扱ってるよね。笑ったのは、上階に行くのに、窓から出て窓からまた入るようなね。あれを見て、ああ、と思いましたよ。石山研だ!今和次郎だ!って(笑)。

馬場 ありがとうございます!

藤森 私たちが若い頃にやっていたことに、興味を持ってもらっていたとはね。

21世紀にとっての建築

馬場 歴史家だと思っていた藤森さんが茅野(長野県)に「神長官守矢史料館」をポンとつくられて。カウンターパンチのような一撃がきた感じがしたんです。オレたちが習って信じてきた近代の建築って何なんだろうって。

さっきの「ユーモアで返す」という話と近いんですけど、「違う作法」で建築をつくっていいんだっていう許しをもらった感じがして。

最初は特殊解だと思ってたんです。でも時代が今になればなるほど、それは特殊解じゃないかも、と思うようになりました。

藤森 どうして?

馬場 僕が「工作的建築」と呼んでいる最近の傾向があって。今までは

建築の現場には、
誰でもやることがある
(藤森)



自分でつくりたい
若い建築家が増えてます
(馬場)

行政や建築家が計画し、ゼネコンや工務店や大工さんがつくり、その空間のなかを誰かが使うという、「計画する→つくる→使う」の順番でものごとが進んでたと思うんです。

でも最近、街で見る風景は、とにかくカフェなんかをやりたい人が、とりあえず空いてる場所を使い始めるんですよ。金もないから、そこをみんなが協力して一緒につくるんですよ。それがいつの間にか街に広がって行って、行政がまちづくりとか言って計画に還元する。

「使う→つくる→計画する」という流れが変わってきている。近代とは全く逆の順番で空間がつくられて行って、そっちの方がカッコいいというか、軽やかで楽しそう。偉そうでもないけれど心地よい、みたいな事例をいろんな街でたくさん見るにつけ、建築家の立ち位置ってどこなんだろうと思うんですよ。

藤森 ああ、なるほど。

馬場 設計・施工の分離は当然だと習ったし、思ってきたんですけど、藤森さんの建築は、あらかじめ自分でつくるのが前提になっている。最初は特殊解に位置付けられてると思ってたんですけど、そうじゃなくて、設計・施工を分離したこの100年くらいの方が「特殊」と言われるのかもしれないと思うようになりました。

藤森 そうだね。

馬場 最近は、自分でつくりたい学生がどんどん増えていて、そっちの方がカッコいいと思ってたりするんですよ。それが藤森建築は実践できていて、しかもつくる人も訪れる人もハッピーですよ。藤森さんの手法は、ボディブローのように若い世代にも効いてきていますよ。

藤森 昔からそうだし、今でもそうだけど、ものづくりのなかで建築はちっとも進歩してないんですよ。こういう領域ってないですよ。世界は進歩するなかで、進歩しないことはとても

大事なことなんだよ。

進歩しなかった理由は、現場でつくるしかないからです。近代化というのは均質化、量産化ですけど、建築で量産できるのは部材でしかない。それを組み合わせて何とかするっていうのは、いまだに現場で人がやるしかないんですよ。現場で人手をかけるってことは、基本的に昔と変わらない。

馬場 建築というのは愚直で愚鈍なんです。

藤森 それともう一つ、素人施工集団の「縄文建築団」をやっている分かったのは、建築の現場には能力に応じて誰でもやることがあるということ。工作の得意な人だけではだめで、食事や3時のお茶を担当をする人がいないとみんなの不満がたまってくる。肉体労働にとって、食事がいかに重要か、楽しみか、やってみて分かる。養生も、地味だけど意外と大変。そうやってすべての人がいろんなことをやりながら、自分が何のためにそれをやっているか一目で分かる。

同じ場所で、誰でも参加することができて、誰でも自分のやってることの全体のなかでの位置付けが分かるという現代の生産は、もはや建築だけ。そう考えると、ものすごく大事なことですよ、21世紀にとって建築は。

ウェブで関連記事

限 本誌未掲載部分を含む対談の詳細版
na.nikkeibp.co.jpで「馬場正尊」と検索

限 定期購読者なら誰でも閲覧できる限定コンテンツ

榎文彦氏

(榎総合計画事務所代表)

普通の人々の「共感」が次の建築を開く



藤森建築の人気の理由は素材の面白さだけではない。藤森氏たっでの希望で対談4人目に登場願った建築家の榎文彦氏は、藤森建築の真髓を「人々の潜在的な欲望を形にしていることだ」と語る。

藤森 榎さんが2012年に発表した論考「漂うモダニズム」(雑誌「新建

築」に掲載後、左右社から書籍発刊)を読み、お話ししたいと思っていました。モダニズムとは何かを考えると、榎さんが指摘するヒューマニズム(人間性)の問題が深く絡むのです。

榎 かつては、「なぜモダニズムか」という使命感と思想を持った建築家と一緒に、1艘の大きな船に乗っているようなものでした。

ところが、情報化社会の登場以降、モダニズムは巨大なインフォメーションセンターと化しました。そして、なんでもありの時代に突入し、建築家は皆、情報の大海原に投げ出されてしまった。建築家は一人ひとり泳ぎ続けなければならない。そのためにはうねりがほしい。

そこで周りを見渡したとき、「共感」

というものの存在に気がきます。SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) などのコミュニケーション手段に代表されるように、共感 は現代において大事なキーワードです。藤森建築の人氣も共感によるところが大きいのでしょうか？

世界から写真が届く「4WTC」

藤森 私は1990年代に、モダニズムの建築家を「白派」と「赤派」に分け、ヴァルター・グロピウスを祖とする白派は抽象性を求め、実在性を尊重する赤派の代表はル・コルビュジエ、と書いた。槇さんは白派です。

建築は実在するものですから、抽象とは何かをずっと考えてきたところ、槇さんがニューヨークのグラウンド・ゼロにつくった高層オフィスビル「4 WORLD TRADE CENTER」

(4WTC) の写真を見て、引き付けられました [写真1]。ガラスの彫刻のような建築で、そのガラスが空を映し出し、純粋な抽象が完成している。

槇 2016年ようやく全部出来ました。反射性を非常に高めたガラスを使っていて、光が反射すると建物の姿が消えてなくなることがあります。

ガラスにはその時々空や周囲の景色が映し出され、様々な表情を見せません。あの建物ほど世界中の見知らぬ人々から「自分はこんな姿を捉えた」と写真が届くものはありません。

藤森 もう一つ面白いと思ったのは、ガラスが空を映し出すと、建物の中に空が入っているように見えること。つまり、内外の「反転同居」です。これは対立物の一つの関係で、その考えを世界で初めて建築空間に持ち込んだのは、千利休の茶室。槇さんのビルも、日本人だから到達できた境地ではないでしょうか。

つくる過程に参加する

槇 ところで、藤森さんの建築には「匂い」がありますか？

藤森 素材の匂いはしますね。



槇文彦(まきふみひこ)
槇総合計画事務所代表

1928年東京都生まれ。52年東京大学工学部建築学科を卒業後、アメリカのクランブルック美術学院とハーバード大学大学院の修士課程を修了。その後、アメリカで建築設計の実務に従事しながら、ワシントン大学とハーバード大学で准教授を歴任。65年帰国、槇総合計画事務所を設立。79～89年東京大学工学部建築学科教授。93年プリツカー賞を受賞



[写真1] 空に溶け込む超高層「4WTC」(右の超高層)は、ミラーガラスが風景を映し、空に溶け込む(写真:伊藤みろ)

槇 僕たちが子どもの頃は友達、あるいは親戚の家に行くと、どこも独特の匂いがしました。それは使われている木材の匂いだったと思う。建築に接したときに反応する人間の五感 は視覚や触覚だけではありません。藤森さんにはぜひ、匂いのある建築をつくってほしい。

藤森 「香り」のある建築と言った方がいいかもしれません(笑)。

槇 藤森建築は仕上げに特徴がありますね。

藤森 私が他の建築家と違うところがあるとすれば、仕上げの段階で現場に行き、自分の手で見本をつくって示すこと。仕上げは自分がやらないと気が済まないんです。それが楽しみで建築をつくっているようなものなので。だから木や土など、自分が扱うことのできる自然の素材を好みます。

変なことをやっているんで失敗の繰り返しではあるのですが、幸いなこ

とに私の場合は建て主が怒らない。

榎 それはどうして？

藤森 仕上げのときは建て主にも参加してもらうことが多く、一緒につくっている感じがあるからでしょうね。丸太の柱などに使う木を選ぶときも、建て主と一緒に山に行きます。

赤瀬川原平さん（「ニラハウス」の建て主）が言っていたことで、選んだ木を切って、それが大きな音を立てて倒れたとき、「もう逃れられない、最後までこの人とやるしかない」と思うのだそうです。

榎 ヒューマニズムにもいろいろな様相がありますね（笑）。

建築を育てるもの

榎 藤森建築は大人が分かる童話性を持っている。ある種の童話の世界が目の前に現れ、それに対する喜びや感動が、藤森建築のユニーク性への共感を生んでいると思います。

自分のことで恐縮ですが、大分県中津市に「風の丘葬斎場」（1996年竣工）をつくった後、人々が「これで私たちが平和に死ねます」と言ってくれました。そのときに僕は、彼らの潜在的な欲望を自分が発見していたことに初めて気付いた。

人々の潜在的欲望、あるいは人々が夢に見ているものを、「それはこういうものではないですか」と建築家がつくって示すことは、人々の喜びにつながる。藤森建築の人気も、恐らくそういうことだと思っております。



素材の匂いはします。「香り」というべきかな（笑）
（藤森）

藤森さんの建築には「匂い」がありますか？
（榎）

例えばあなたの「高過庵」^{たかすぎあん}（2004年竣工）は、古代からの人間の一つの夢が存在している。人々から喜びの言葉で迎えられることはたくさんあるのでしょうか？

藤森 私の場合、榎さんと違って巨大な建築をつくったことは一度もなく、関係者の共感に包まれながらやってきたようなところがありまして。

榎 建築家は皆、つくったものを社会が喜んでくれるのが最も楽しい。僕はいつも言うのですが、建築の最後の審判者は「時」で、パブリックの共感が建築の歴史になる。

藤森 私自身は、ある範囲の人々の内々で、自分の趣味でやっているような気持ちでこれまできたんです。「高過庵」はその典型で、しばらくしたら壊れるだろうし、壊していいと思って発表する気もありませんでした。でも、そういうものにも光を当ててくれる人が現れた。建築っていいなと思

うところですね。

榎 それは大事なことですよ。これからは建築を見る目、見方、いろいろなものが多様になり、それが新しい建て主層をつくっていく。金融資本が大きなものに飛びつく流れは今後も変わらないかもしれないけど、一方において、藤森建築のようなものを育てようという意識は、建築界だけから生まれるものではありません。社会がそうになっているという実感は持っていますか？

藤森 人に言われて、最近やっと持てるようになりました。

榎 藤森さんは、「建築には夢がある」ということを示してくれている。それは一つの大きな功績だと思います。人間にとって夢は、やっぱり大事なものですから。

▶ウェブで関連記事

限 本誌未掲載部分を含む対談の詳細版
na.nikkeibp.co.jpで「榎文彦」と検索

限 定期購読者なら誰でも閲覧できる限定コンテンツ

禁じ得ない“装飾”の2文字

若い頃、建築論をしばしば耳にした。例えば、京都に増田友也先生(建築家で京都大学教授、1914~81年)という理論家がいて、道元禅師の言葉を手掛かりに、「そこに壁がある、ということをもどのように人に伝えればいいのか」と語り始めてすぐ沈黙状態に入ってしまった。

今にして思うと、建築の存在論について思考を巡らしておられたに違いないが、若い私には問いの意味もその必要性も全く理解できなかった。言葉面で理解したとしても、実感を持ってそうした抽象的思考を捉えることはできなかった。

それから半世紀して、今は、この度の対談のようにいろんな建築家や人と言葉を交わすなかで、そうした抽象的領分をリアルに感じながら考えることができる。

例えば、“建築という物体を可能にしているのは使われている材料。その表現を支えているのは〇〇〇”。

とつづりながら、〇〇〇の3文字について“世界像”というか“宇宙像”というか“あの世”というか、などこれまでの建築体験を思い返しながら探っている。〇〇〇の3文字は、いずれにせよ、この世に生きる者の心を、この世から上方に向かって脱出させるだけの力を持つイメージでなければならぬ。

3文字については触れず、建築を

生み出す材料について述べるならば、20世紀の建築を可能にしたのは、ル・コルビュジェの宣言したように「鉄(金属)とガラスとコンクリート」の3つ。

伊東豊雄氏にも装飾の芽吹き

こんな誰もが知る原則を改めて述べるのは、モダニズム建築が誕生してから100年たつというのに、いまだにこの3つの材料しか見当たらないし、今後もこの3つを超える材料は現れるとも思えないからだ。

3つの材料は常に三位一体で推移してきたが、しかし表現に着目するならば、優劣があった。まずコンクリート(鉄筋コンクリート)の時代が先行し、続いて鉄骨の時代が後を追い、今はガラスの時代を迎え、槇文彦の「4 WORLD TRADE CENTER」(60ページを参照)が、今の世界の頂点を画している。

と、こう私の中の建築史家は時代をにらみながら、しかし私の中の建築家は「自分のやることではない」とつぶやく。

つぶやきながら頭には“装飾”の2文字が浮かぶのを禁じ得ない。

これまで自然素材の素材感を重要なテーマの1つとして、それなりの成果を上げてきたが、しっくい^{しっくい}の白い壁に炭を点々と付ける試みを続ける中で、おのずと装飾の魅力に目覚めた。

しかし、村野藤吾や今和次郎がしたような歴史主義時代のトレーニングを欠く者に、おいそれとできることではない。だが、目覚めたからにはやるしかない。伊東豊雄の近作のいくつかには装飾意識がほのかに芽吹いているように感じられる。

自然素材を使ったシロートにも可能な装飾が、しっくい壁への炭付け以外にどれだけあるのか探するため、「4 WORLD TRADE CENTER」を上空はるかに望みつつ、下界の霧中を歩こうと思っている。

(写真:鈴木愛子)

